

喫茶店文芸

2021年2月号

お題「氷」「植物」

喫茶店文芸 2021年2月号——目次

山中隆二 氷河の桃 1

天野満 三角コーン、はじめました 4

福原大輝 空の章 9

平田 ヘイデン コーヒーブレイク 14



氷河の桃

山中隆司

ここには春になると桃がたわわに実る山があった。今では氷河があるだけだが奥には一本の桃の木の見ることしかできない。この物語はこの氷河が生まれるまでのお話である。

桃から生まれた桃太郎は鬼の乱暴に困っていた住民を助けるために勇敢にも立ち上がり、鬼ヶ島に向かい鬼を倒した。

人間から奪った食料品ですでに食べられてしまったものは取り返すことができなかったので、その代わりに鬼が隠し持っていた金銀財宝を持ち帰ることした。

その金銀財宝を船に詰め込んでいる際、桃太郎がたまたま黄金に輝く小槌を落としてしまう。それが横に座っていた犬にあたりとその姿はたちまち年若い長身の男に変わる。

「これは噂に聞いていたが、本当に打ち出の小槌が存在していたとはものがあつたとは」と桃太郎は叫ぶ。

「こりゃ、すごい。世界が広く見えるし、今まで大きな石に見えていたのがまるで小石だ」と犬も驚きの様子だ。

その変化を見て、犬と同様に雉と猿は驚いた。人間になれるというので人間になった犬に小槌で叩いてもらい雉も猿もそれに続き、人間の姿になった。

「私も桃太郎さんに助けられて、この御恩は一生かかっても返せないと思います。」

あのとき、鬼の仕掛けた罠にかかって、今にも死ぬというところで助けてくださり、その上、きびだんごを恵んで頂いた。そし

て、一人ぼっちだったので仲間にもしていただきました。この御恩は鬼ヶ島を倒したただけではとうてい返しきれものではありません。

これからその御恩を返したいと思います」

犬と猿もこれに続いてお礼を述べた。桃太郎は共に戦ってくれたお礼を述べる。

帰り道は鬼から奪った金銀財宝があつたのでゆつくりと帰ったが、桃太郎の里の里の近くまで戻ると人間になった犬、雉、猿が同時に口を開いた。

「私たちは人間になりました。これからは遠くで桃太郎さんのことを見守ろうと思います。もう会うことはないでしょうがこれからもよろしくお願いします」

そう言い残して人間になった犬、雉、猿は山の中に入っていた。

数年後、彼らはそれぞれ結婚相手を見つけて結婚し、子供を設けた。かつて犬であつた者は犬養太郎と名乗り子供には犬養健児助と名付けた。かつて雉であつた者は留玉助と名乗り子供には留玉彦と名付けた。かつて猿であつた者は楽々森猿太郎と名乗り子供には楽々森猿彦助と名付けた。彼らは時々連絡を取り合いながらも平和に暮らしていた。彼らの一族には一つの約束事があった。それは桃太郎の次なる誕生を見届けることである。桃太郎が生まれるとは鬼が復活するときだと考えたのである。その約束を忘れないため代々自身の名前を襲名していった。

その約束に従い毎年春になると桃の実を求めて多くの動物に混じって、その遠い子孫である犬養健児助、留玉彦、楽々森猿彦助

も集まる。今では桃太郎が生まれたとされる山は桃の木で埋め尽くされた山には甘く美味しい桃を求めて多くの動物が集まる。

「今年も桃は実らなかったね」と桃園の見回りを終え疲れ切った楽々森猿彦助が言う。

「今が平和な時代だから英雄を必要としていない。それは嬉しいことだよ。猿よ。お前も父さんから聞いてるように刀を持って赤鬼の一族と戦う。俺は戦いたくないね。平和が一番」

演説するようにいう。時々、留玉彦は仰々しい態度はイヤになるが確かに平和が一番である。

「お前の意見には同意するが、私たちは春の間、ずっと里を離れて桃の木を見て英雄の誕生していないか確認しないと行けない。春の間、毎日毎日朝から晩まで桃が実っていないか見て回る。はっきり言って面倒くさいんだ」

「留玉彦。お前は身軽だからからすぐに桃の木を見て回れるだろうけど、私は走ってこの桃を見て回るの、お前に分かんんだろが苦手なんだ。それに毎日の山登りは辛い」

楽々森猿彦助はパンパンになった足を見せつけてくる。今日は行きたくないと明らかに訴えている。

「わかったよ。今日はまだ来ていないが犬と二人で行ってくる。そういうばまだ来てないな。しっかり者のアイツが来ないなんて何かあったのかもしれない」

「先に山に入っているから、犬が来たらそう言ってくれ」と言い残して山に入る。山の中は桃の芳醇な甘い香りで包まれている。あたりには小鳥が桃の実をつついていたり、横を流れる小川で猫が水を飲んでいいる。このような動物たちをあえて追い払う

ことはしない。守るべきは桃太郎になる桃の実である。これは山頂にある桃の木にしか実らない。行きなれた山道を分け入っていく。すると大きな物体がころがっているのが見える。

ここに岩なんてあったのだろうか。これまで数百回はこの道を通っているの間違えることはないはずだ。近づいていくとそれは犬養健児助であり、彼が肩から血を流して倒れていた。

慌てて駆け寄るとそれに気付いた犬養健児助は絞り出すような声で

「鬼が現れた。やつは山頂に向かった。山頂にある桃を守ってくれ……」

そう言い残して彼は気絶した。

今日、何が山に入った気配は感じなかった。私たち三人の目を盗んで山に入るなんて一体何者なんだろう。山頂まで登るとそこには髪が長く二本角の鬼が舐め回すように桃の実を触っている。

「それに触るな。さもないとお前を切るぞ」

と刀を突きつける。

「おお、これこれは留玉彦ではないか。さっき犬養健児助とかいう男を倒したが、今ごろ来ても遅いよ。だって、もう私の欲しい物が手に入ってしまったんだからねえ。私が欲しかったのは桃太郎の桃じゃあない。桃太郎そのものさ。彼はねえ私の子供なのさ。私が人間と結婚して生まれたのが桃太郎。でもね、当時の鬼の首長はそれが許せなくなて生まれたばかりの我が子を桃に詰めこんでこのあたりの小川に流したのさ」

「嘘だ。確かに桃太郎は桃から生まれた。それは子供のいない夫婦の為に神が授けた贈り物ではないのか」

目の前にいる鬼は笑い、

「それはおめでたい考えだね。確かに老夫婦はそう受け取った。事実は私の息子なのさ。人間の子供が二、三年で一人前の大人になるわけないだろう」

そう言われると言い返すことはできない。

「凶星だつて顔してるねえ。いいこと。私はこれまで数百年待った。あのときは、鬼退治とかのたまつて鬼ヶ島に来たときは驚いたけど、でもその時は私のことを親だと思っていなかっただろうよだから戦えた」

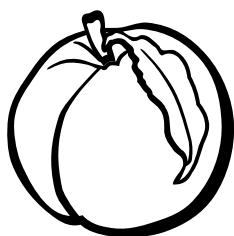
「それがなんだつて言うんだ。確かにこの桃の実から生まれる桃太郎がお前の子供だしよう。でも、お前には愛する資格があるつていうのか。犬養健児助手をかけた。それだけでもお前に桃太郎を渡すことはできない」

「お前たちならそういうと思つていたよ。だからこうするのさ」

鬼の女は服の中から銀色に輝く扇を取り出した。一回仰ぐとあたりに北風が吹き、二回仰ぐと雪が降り始め、三回仰ぐとあたりは猛吹雪に包まれた。この吹雪は数百年間続いた。その結果、春になると桃の香りがする楽園は永久に溶けることない氷河の中に包まれた。

これは母親の愛かそれとも……。

了



三角コーン、はじめました

天野 満

亜麻野ミチルにとって、恋愛とは三角コーンのようなものだった。

置いてあれば迂回して通るし、人生をかけるようなものでもない。自分の生活に取り入れたいとも思わないのであった。

例えば、ドラマや映画、小説などでも、ラブコメと呼ばれるジャンルは全く見ないし、音楽を聴くにしてもラブソングに感動したりはしなかった。

ラブコメよりはアクションやサスペンスのほうがスリリングで楽しいと思っていたし、ラブソングを聞いてうっとりするより、ロックナンバーで頭を振っていたい、と考えていたのである。

恋愛について、ミチルはこう語る。

「俺には他にやることがある。音楽をやる、文芸をやる、仕事をやる、飯を食う。エトセトラ。恋愛してる時間なんてない——。でもまあ、そんなこといいじゃないか。ところで、コーラ飲む？ 恋愛なんかより甘くて刺激的だぜ。なんちゃってねっ！」

でもお前、恋愛したことないじゃん。

「ああああああっ、うるさいっ、うるさいっ、うるさいっ、黙れ黙れ黙れ！」

ミチルはコーラの瓶を叩き割った。

「つーか、そもそもお前誰？ なんで俺に語り掛けるの？ お前

の着てるTシャツださっ。そないなもん、どこで売ってんねん」
ああ、ミチル、かわいそうに。長きにわたる孤独がお前の心をいじかせてしまったんだね。

「さっきから恋愛、恋愛って、やかましねん！ でもな、俺かて、仕事はしてるし、税金も払ってる、自活もしてる。誰にも迷惑かけてないで！」

ミチル、もう怖がらなくて良いんだよ。

だって、君は俺なんだから。

「認めますう。俺は恋愛がコンプレックスなんですう」

よく認めたぞ、ミチル。ほめて遣わす。

長年抱えて来た自身の問題——齢二十八歳にして、恋愛経験のないこと——に向き合うにはとても勇気が必要だった。

だからこそ、亜麻野ミチルという架空の人物を作り出し、長々と三文芝居を続ける必要があった。ミチルを通じて自分と向き合うために。

童貞じゃん、と言ったのは他人じゃない。あれは俺の心の声。自身の深いところからから響いてくる、その声によって俺は苦しんでいたんだよ。

みんなが楽しそうに恋愛してるのに、俺は全く恋愛出来ない。だから、恋は三角コーン、と嘯いて、孤高のパンク野郎を気取り、余裕ぶって生きてきた。

でも、実際のところはどうか。傍から見たら、俺は孤高、というか、甘ったれた事情で集団から孤立してる、ただの寂しい人で、はつきり言ってダッサダサだった。カッコいいと思って着てる革

ジャン、それ合皮じゃん。

ミチル、っていうか俺は、恋愛を三角コーンだと言った。それはコンプレックスの裏返しではないのか。三角コーンが先端が天に向かって伸びているのは、幾何学や、構造上の問題ではなく、俺の精神の問題なんだよ。失敗を恐れて、傷つくのが怖くて、恋愛したい気持ちを抑え込むから、三角コーンは天を衝くのだ。その先端で、俺の心のフタを突き破るために。

じゃあ、どうすれば「三角コーン問題」を解決できるのか。俺はすでにその答えを知ってるはずだ。

恋愛をやればいいんだよ。

「でもなー、今日は小説書かなあかんし、楽器も弾きたいし、天気も悪い。肩もこってるし、隣の山田さんも死んだ。キリ悪いから明日から始めよか」

それがダメなんだよ！

今、この瞬間こそが最高の好機でこれ以上はない。たとえ、山田の命日であってもそれは揺るがない。お前はまた言い訳にまみれて、絶望の穴倉で嘆いていたいのか。心の声にフタをして、鱈のように白こい顔して生きていくのかよ。そもそも山田って誰だよ、勝手に殺すなよ。

俺は山田に謝罪しつつ、マッチングアプリをダウンロード、光より早く月額料金を支払い、サービスの利用を始めた。

勝った。俺は確信した。自分が勝者だと思った。ぬるま湯から飛び出して、冷たい風の吹きすさむ外の世界に旅立ったのだから。

安物の革ジャンも、山田の亡霊も、今や極彩色の光を放っている。そんな気がして。山田は死んでいないけどね。山田は永遠なんだから。

「連絡が来ないじゃないか」

アプリを初めて、二週間。俺にアピールをしてくる猛者は現れないのであった。俺はと言えば、日に百件はアピールをしている、にも関わらず、まったくマッチングしないのであった。これでは〈ぼっちン愚アプリ〉ではないか。合皮の革ジャンも、すっかり光を失ってしまったことであるよ、というのは兼好法師の弁。徒然。草。

何があかんのというのか。

「顔写真やろ」

相談にのってくれた親友の一言は、あまりにも的確だった。断腸の思いで辛辣な comment をしてくれたことには感謝しかない。顔さえよければ、とにもかくにも会えるのか。

その日を境に、俺はインスタグラマーもかくや、というほどのセルフイー野郎として、鱈のような自分の顔を何百枚もとり続けた。

自撮り写真というやつは、なぜあんなに気色悪いのであろうか。〈狙ってない状態〉を装えば装うほど、笑顔は人造人間じみて、肌が作為のファンデーションで覆われてしまう。かといって、本当に狙わないで写真を撮ると、ただ単に、うすらバカが写っているだけになってしまう。

すっかり、ルッキズムの奴隷に身をやつした頃、奇跡の一枚の撮影に成功した。

「——はじめまして、モルコ（仮名）さん！ アマノと申します！ いいね、ありがとうございます！ よろしくお願いします！」

俺は自宅でスマホ片手に踊り狂っていた。ついに女の人とマッチングしたのである。

ははは、俺にも春が来た。写真を変えただけなのにね。見てよ、温かな日差しが氷の大地を溶かしていくよ。あの大地に芽吹いた花の名を君は知っているかい？ 実は僕も知らないんだ。だから、この花に君の名前をつけようと思うんだ——。

〈お相手のメンバーはすでに退会しています〉

踊り疲れた俺に、いつまでも鳴らないスマホが現実を通知してきた。

近所の公園に建てたモルコさんへの思いの墓、そこに突き立てたアイスの棒が土に帰る頃、虹が空に橋を渡して、俺を祝福していた。

人生初のデートの日がやってきたのだ。

〈モルコさん事件〉のあとも俺はめげずに他の女性と連絡を取り続けていた。その中の一人、ペシル（仮名）さん、という女性と、ついにデートをするに至ったのである。

本日の俺はイケてる、と、公衆便所の鏡の前でキメ顔をする合皮の革ジャン男、であるところの俺は、最高に気色悪く、犬も食

わぬ有様であった。犬だってさえない童貞よりドッグフードが食べたいに決まっている。

集合場所の駅に集合時間の三十分前に到着した俺は、改札の雑踏の中に、ペシルさんの姿を見出そうと躍起になっていた。

そして、ついに時は来た。

「はじめまして、ペシルです。アマノさんですよね？」

猥雑な都会の駅、その真ん中に大輪の花が咲いた。それは彼女の微笑だった。

ペシルさんは、写真で見たとときよりも、はるかに美人だった。写真は綺麗に映るように盛っているから容姿には期待するな、という一般論を真に受けていた俺は意識がどこかに吹っ飛んでしまいそうだった。だからこそ。

「あいえあう、あああああおえう。〴〵（そうです、はじめまして）」

俺は〈「ア行」しか喋れないマシーン〉と化してしまったのである。緊張が舌の筋肉を役立たずにし、子音を脳から消し去った。

「とりあえず、店行きましょか」

「おうえうえ！（そうですね）」

大変に困ったことになった。入れる店が見つからないのである。集合場所は、繁華街だったので、店がたくさんあるにも関わらず、どこも席が一杯だったのである。

もともと、その日の気分で入る店を決めよう、という話になっていたから、特に予約はしていなかった。そのフリースタイル性が裏目に出てしまったのである。

ピンチに遭遇した俺は、すっかりワカメ男になっていた。何も

本当に海藻になったわけではない。早く手頃な店を見つけなくては、という焦りのあまり、変な汗をかいて、それもとくに、額の周りが汗まみれになっていたがために、前髪がデコにペタペタと張り付いて、ワカメみたいになっていたのである。頭髮の貧しさが強調され、清潔感が茶毘に付した。

「あのお店に入りましょう」

俺はペシルさんに提案した。地獄にも仏はいるものである。客の少なそうな喫茶店を運よく発見できたのだ。我々二人は、飛び込むようにその店に入った。

仏がいても、地獄は地獄だった。

入った喫茶店は、考えられないくらいコーヒーが不味かったのである。コーヒーというか、色付きのお湯であった。カップのせいのなか、掃除してない金魚鉢みたいな臭いがするくせに値段は一杯千円、とかなり強気だった。これでは客が少ないのもうなずける。

せめて、会話だけでも楽しんでもらえないだろうか。と、俺は必死になって話題を絞り出そうとした。まずは天気の話など、当たり障りのないところからスタートするべきだろうか。頭の中でシミュレーションしてみる。

「いい天気ですよね」「曇ってますが」「夏ですね」「冬ですが」「ヘクトパスカルがすごいですね」「喧嘩売ってますか？」

ダメだ！ 天気の話なんかしたら、このデートが破綻するに決まっている。もっとも、店選びの段階で、ペシルさんは俺のこと

を見限っているのかもしれないが。

俺は一世一代の大勝負に出るような気持ちで、ペシルさんに尋ねた。

「マイタケ、美味しいですよね。好きなんですか？」

俺は気が狂ってこんな話題を提供したわけではない。これは俺なりの作戦だった。マイタケ、と言うのはペシルさんがプロフィールに記入していた好きな食べ物なのだ。好きなものの話題なら、相手が食いついてくれるのではないかと考えたのである。

「まあ、好きですけど……。突然ですね」

前言撤回。やっぱり俺は気が狂っていたのである。天気の話題にしておけば良かったものを、なぜマイタケを話題の切り口にしてしまったのか。きのこ農家の会合じゃねえんだぞ。

「すみません、突然でしたね。いい天気だし、マイタケ食べたいなあ、って」

ワカメ男が必死でキノコの話してらあ、と世間中に笑われているような気がして、冷や汗が止まらなくなった。やがて、あごの先から一滴の汗がコーヒーカップにダイブした。

「すみません、急用を思い出したので、失礼します」

と、言い残して、ペシルさんは瞬く間に店を出ていった。

三人の男たちが、俺の目の前で泣き崩れていた。

日本人が一人、西洋人が二人。彼らとは面識がなかったが、俺は彼らの名前を知っていた。

那須与一、ロビン・フッド。それからウィリアム・テル。彼らが一斉に言う。

「なんでお前の矢は刺さらねえんだよおおおおお！」

彼らが恋のキューピッドからの業務委託を受け、恋の矢を放った人間たちだということを、なぜか俺は知っていたのである。

だが、俺は彼らに労いの言葉の一つもかけてやることが出来なかった。キムチチャーハンを作らなくてはならない、という強迫観念が俺の頭を混乱させていたからだ。

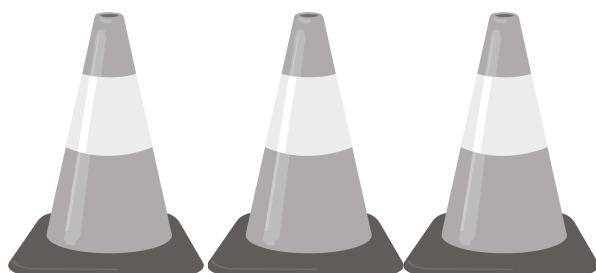
そんな夢を見たんだよ。実際には見てなくても、そういうことにしておかなくては、三角コーンの先端が俺の心臓をつき破りかねない。

どれだけ失敗しようが、俺は何度でも立ち上がり、恋愛に挑み続けようじゃないか。

朝ぼらけの部屋の中、俺は正座して誓った。

三角コーンが目の前に置いてあったらどうするかって？

決まっているじゃないか。避けて通らず、人生をかけて、自分の生活に取り入れるんだよ。(了)



空の章

福原 大輝

ユビキタス先生は子どもたちに向かって言った。

「空を見てみなさい。あれが戦いの色だよ」

ミトは子どもたちと一緒に空を見上げた。いつもの、曇天のような鉛色の空だった。灰色の砂埃が舞っていて晴天であつてもそう見えてしまうのだ。がれきの山の中で暮らしている子どもたちには慣れ親しんだ空だった。

「わからないよ」

「先生、どの色のこと？」

口々に子どもたちが言うのを聞き、先生は仕方ないというように笑った。

「いつか分かりますよ。先生にははっきりと見えています」

子どもたちは驚いた様子で再び空を見上げて言い合った。

子どもたちが集まっている部屋は部屋と呼ぶには頼りない。

ひび割れた天井は今にも壊れそうで、もしも今ここで戦いが起きているのだとしたら、一撃で破壊されてしまうだろう。先生は窓枠だったであろう壁の穴から空をのぞいていた。

「では先生に見えているのは何色だと思いますか……。では、パヤオ」

一人の子どもが元気よく立ち上がった。頬は灰色に汚れている。

「黒色ですか？」

「そうでしたら、夜にはずっと戦いの色なんでしょうか？」

先生が笑うとパヤオは首をかしげながら座った。先生は子ども

たちを見回してから続ける。

「みなさん分からないですかね……。先生には赤い色に見えているんですよ」

子どもたちは驚きながらも興奮して空を見ていた。ミトは離れたところで鼻を鳴らした。先生から何度も聞いた話が、今再び繰り返されようとしている。

「赤は血の色です。血がにじんているような空の色が見えたら、それは戦いが始まる合図なのです」

子どもたちが目を輝かせてうなずくのを見る度に、ミトの心には暗いものが漂っていくのを感じた。

「では平和って何だと思いますか」

先生が訊くと、一人の子どもがまた立ち上がった。

「お母さんやお父さんがいることです」

「お母さんやお父さんがいたとしても戦いは起きるでしょうね」

ミトは驚いて顔を上げたが、先生は何事もないような様子で子どもたちを見つめている。別の子どもが立ち上がった。

「おいしいごはんがあることです」

「そうですね、それも平和なことです。ですが、それらの平和なことは戦いによって簡単に壊されてしまいます」

子どもたちは悲痛な顔を浮かべた。ミトもつられて顔をゆがめる。

子どもたちが言ったことは今も実現していない平和であり、それゆえの願いだった。その平和を願ったとしても戦いが起きるのなら、その願いさえも失われてしまう。既に不幸なはずの子どもたちに、もう一度不幸が訪れるかもしれない。それが切なくて、

ミトは顔を上げることができない。

「本当に大切なことは……」

先生は子どもたちの顔を見回した。一人一人と目を合わせた後、口を開いた。

「空を見ることです。そして戦いが起きることをいち早く知って、安全なところへ逃げなさい。そこにきつと平和があるから」

ミトにとつて、また子どもたちにとつても何度も聞かされた話だった。だが、子どもたちはうなずき、空を見上げて、自分も先生みたいに空の色を見たいと、口々に言った。その姿が自分自身が子どもだったときと重なって、ミトは口をつぐんだ。

先生は手を叩いた。

「先生が言いたいことはわかりましたか。では今日はここまで」

子どもたちは皆お礼を言い、四方のがれきの道へと駆け出していく。

一人の子どもが先生の前に立ち止まった。

「……先生って神さまみたい」

「さあ、どうかな……。気を付けて帰るんだよ」

うなずいて駆け出す子どもの姿ががれきの山へ消えていく。栄えている街から離れて、子どもたちは汚れきったぼろきれを身にまとい、ここで暮らしている。

先生は子どもたちを見送った後、がれきの道を歩き始めた。足元にはガラス片が積もっていて、ミトは子どもたちが心配になった。

子どもたちが住む区域を出て、街の方へと歩く。街の通りを抜けて、その外れに丘がある。その頂上にある家でミトは先生と暮

らしていた。草原の中にポツンと立つこの家からは、空が一面に見渡せる。青かった空が翳って、今は西日が空を赤く染めていた。

「先生、赤はこの色ですか？」

訊いてみたが、先生は黙って見向きもせず家の中に入ってしまった。

ミトはしばらく空を見つめた。赤色は紙に塗りたくった絵の具のように、薄く広がっていた。どうしても血の色には見えなかった。その後はやがて夜になっていくのだろう。向こうから藍色が押し寄せてきて赤は消えてなくなっていく。

肌寒くなってきたミトは家の中に入った。机にはいくつもの酒瓶が倒され、中身が飛び散っていた。部屋の左側にあるソファベッドには、大きないびきをかく先生がいた。ミトは溜息をついたが、やがて机上の酒瓶を片付け始めた。

その昔、ミトもあのがれきの山の中で生活していた。物心がつくころには親がいなくて、気が付いたらそこにいた。周りには似たような子どもたちがいて、そのすべてがみなしごだった。

先生と子どもたちを訪問するたびに、そのときのことを思い出して、子どもたちの姿が昔の自分自身と重なった。

がれきの山で暮らしていたある日、人狩りが街から来た。何が目的かはわからなかった。だが、逃げなければということだけを本能的に察知して、皆逃げた。子どもたちは迷路のように入り組んだ道を駆けていったが、次々と人狩りにつかまってしまった。ミトも人狩りから逃げているうちに、袋小路に追い込まれていた。だがそのとき、建物の影から誰かに手を引かれた。それがユビキ

タス先生だった。先生は白いマントの内に彼を隠して、人狩りから見えないように、丘の上の家まで連れて帰った。

人狩りの襲撃からミトだけが救われて、他の子どもたちは人買いつかまった。そう先生は言った。自分が生きる事で必死だったから、他の子どもたちに直接手を貸して助けることはなかったが、必死に生きている子どもが他にいるという仲間意識がどこかにあったのかもしれない。だから、生まれて初めてミトは大切なものを失った感覚を味わった。

先生はその当ても子どもたちに対する授業を行っていた。泥だらけの子どもたちに向けて、平和の尊さや、それを脅かす戦いの不条理さ、それでもやがては子どもたちにも平和が訪れる、と言った。そのことを子どもたちは信じて疑わなかった。ミトも例外ではなかった。

しかし、ミトは先生と生活を共にすることで、その本性に気が付いていった。

丘の上に立つ家は薄茶色の整ったその外観に対して、部屋の中は乱れていた。掃除はされておらず、腐臭がした。酒の匂いが立ち込めていて、しばしば夜中には知らない女が出入りした。

ミトは先生から部屋の整理整頓や食事の準備など、身の回りの世話を任された。毎日大量の酒瓶を片付け、部屋の掃除をした。

先生は日中に外へ働きに出ることもなく、夜中は見知らぬ女たちと酒を飲み騒ぎ続けて、吐き散らかしそして眠った。次の朝には強盗が現れたのかというほど、部屋はひどい有様だった。実際には女たちは物を盗んでいったのではなからうか。

最初の頃ミトは酒を片付けろとか、女を呼ぶなとか注意をして

いた。だが、先生は親戚の集まりだとか大切な仕事だとか、正当そうな理由をつけてははぐらかし、嘘をつき、部屋に漂う酒の匂いは消えなかった。

その姿に、子どもたちに向かって平和を説いていた先生の面影はなかった。ミトや他の子どもたちが思い描いていた平和は、先生のあの面影とともに消えていった。ミトは先生の言うことを信じて、われ関せず日々を過ごしていた。

ごくたまに先生は教会に行った。補助をするように命令され、ミトも連れられて行った。

その教会はすたれ切っていて、ボロボロの椅子と教壇があった。その教壇の前で先生は祈禱らしきことを始めた。正面の神棚へ向かって祈るようにしたかと思いきや、腕を振り上げて野太い声を上げた。普段から酒を飲んでる人間とは思えなかった。そして振り向くと決まりきった話を始めた。空の色の話だ。赤い色が見えたらわき目もふらずに逃げなさい、と静かな声で話した。

教会に集まった僧侶や、神父、また、近くの村の人々は感謝の弁を述べ、先生に金を献上した。一度は遠慮するものの、結局先生はそれを恭しく受け取った。皆が明らかに先生を信じ、神として崇め奉った。

また、人狩りが過ぎ去った後に、がれきの山の中に住み着いた子どもたちにも同じことをした。いろんな村の貧しい人たちにも。全く同じ話が延々と繰り返された。

どの場所でも、ミトにとっては信じられない光景ばかりが繰り返された。いったい先生が何をしたというのだ。

こんな小手先のまじないのようなことをして、皆から巻き上げ

たその金で酒を買い、女を呼び、情けなくだらしない生活をして、そして、皆の未来は変わったのか。先生のあのよくわからない話を聞いて、皆は何を知ったのか。

なぜ彼等は疑うことを知らないのだろうか。

先生は皆を騙して金を稼いだ。その金で普通の食事を得られているミトは、先生の悪事に加担している一人だということを自覚した。その罪の心はミトを暗くした。

なぜ先生は自分を救ったのだろうか。自分はあのがれきの山の中にいた子どもたちと一緒に、人狩りに連れていかれた方がよかった、と思い始めていた。

それでも、先生は皆の聖人君子であり続け、正しくもないことを説いて、無意味な幸運を人々に与えた。そしてミトはそれを手伝い、その金で生活し続けた。

あるとき、ミトは先生に訊いた。

「人を騙してばかりで、先生に罪の心はないんですか？」

騙してなどいない、と先生は酒瓶を傾けていた。

「今は未来を見通そうとしているんだ」

「はい？ 人からお金を巻き上げているだけでしょ？」

いや、と首を振った後、先生は小さくつぶやいた。

「神はきつというはずだ」

ミトは、先生が突然に訳のわからないことを言うのに慣れてしまった。

「あなたが神なんじゃないんですか？」

彼はからかったが、先生はふんと笑うだけで質問には答えない。

「私は確信しているんだよ」

「何のことですか」

「見えるんだよ。神がいるってことと……」

額に手を置いて眉間にしわをよせ、先生は目を閉じた。

「それと、プロペラをつけた車がここに来るのが見える。きっと彼等がこの世界を変えてくれる」

先生の話を聞き慣れたミトでさえ、何を言っているんだと思った。

「そんなのどうでもいいです。平和な世界が来ることを願っています」

ミトの言葉に反応して、先生は正気を取り戻したように、すぐにミトをにらみつけた。

「いや来ないね」

「なぜわかるんですか」

「空が赤いからだ。赤は戦いの色なんだよ」

「またそれですか！ 何も見えやしませんよ」

溜息をついた後、じゃあきこうか、と先生は酔って焦点が乱れた目をミトに向けた。

「平和とは何か？」

「誰も不幸ではないことです」

ミトは即答したが、先生の答えも早かった。

「それは不可能だ。幸せは不幸せの上に成り立っている」

「そんな！ あんた、教会の人とか子どもたちに平和はあると言っているじゃないか」

「だから平和なんてない」

「はあ？」

先生は一瞬、遠くを見るような目付きをしたが、やがて向き直った。

「だからこそ、未来の声に耳を傾けるしかないんだよ」

最後の言葉だけは、子どもたちに話すときの、『先生』の口調でそう言った。

ミトは溜息をついて、先生から背を向けた。

「政治は何も作らない。私みたいな人間が未来を導くよ……」

その後も先生は妄言を繰り返して、満足したら眠った。ミトは毎晩こういうことに付き合わされている。先生に見えていることなんか心の底からどうでもよかった。

けたたましい轟音で目覚めた。子どもたちが殺されていく。そういう夢と区別がつかない感覚がミトの中にあつた。

ユビキタス先生はめずらしくすでに身支度を整えて、白いマントを羽織っている。

なぜなのだろう。どこへいくわけでもないのに。

目を逸らさずに窓の外を見つめている先生の姿を見て、いやな予感が胸をよぎった。ミトも窓から丘の下を見渡すと、子どもたちの住む区域から火が上がっているのが見えた。

彼は思わず家の外へと飛び出した。区域にはまんべんなく火が広がって、その周りさえも飲み込み始めていた。

なぜ平和な世の中は来ないんだろう。

戦いを起こしているのは誰なのだろうか。ミトには世の中の事情がわからない。だけど、人狩りだとか盗賊だとか、悪い人達はきつとたくさんいる。

彼等はなぜ戦いを引き起こすのか。そして関係のない子どもたちを巻き込むのか。

平和なんかない。先生が言ったことは確かなことなのかもしれない。

背後に先生が来て、同じように火が上がっているのを見つめていた。先生はもしかしたら火の原因を知っているのだろうか。

「なぜ？」とだけミトは訊いた。

「仕方のない犠牲だ」

そう先生は冷たく言い放った。

ミトが言い返そうとしたその途端、視界の端に色が映った。すぐさま空を見上げると、赤く染まっていくなが見えた。昨日見た夕焼けとは全く違う、赤色だ。

血の色だ、と咄嗟にわかった。

もしかすると今朝目覚めた瞬間からかもしれない。空が赤色に染まるのをはつきりと感じとっていた。そのことに違和感はなく、彼の心は疑うことを知らなかった。

戦いの色だ、と彼は悟って、横に立つ先生を見つめた。先生は一度頷いて、薄く、そして寂しそうに微笑んだ。

執筆していた論文の最後に入れたピリオドが集中を解く一滴の呼び水になった。

思考を占拠していた研究内容が霧散して、空っぽになった頭をドラミングしたくなるような愉快的な気持ちが湧いてくる。

「ふひ……へへへ」

まとめ終えた論文を保存して、VRグラスのディスプレイを埋めていたウインドウを全て閉じる。テキスト入力用の白い画面が消え、代わりに研究室兼自室の平坦な灰色の壁が目映る。

「はあ、終わったー！ んっふふふ、コーヒーでも飲もうかな」

頭に被った入力端末を筆取り取ってすぐ傍にあった棚に放りながら、胸中で盛大に自分を褒め称える。僕えらい。今日を有能記念日に制定して祝日にしよう。

視界の隅に表示された時刻は朝八時二十分。一晚中酷使していた目は乾き気味で空気が染みるが、達成感にかき消されたのか眠気はない。

「ねえHel、今日の天気は？」

天井に備え付けられたスピーカーから中性的で特徴のない声で返事が返される。

「屋外は本日曇り時々吹雪、摂氏マイナス十五度。吹雪が予測されているため外出禁止令が出ています。熱帯温室は摂氏二十五度、温帯温室は摂氏十四度、亜寒帯温室は摂氏マイナス六度です。熱帯温室は十七時から十八時まで散水予定です」

椅子の背もたれに体を預けて今日のタスクを確認する。論文の執筆を前倒しにして片づけたので、今日しなければいけないことは研究に使用している植物のサンプル採集だけだ。論文の見直しも実験も、明日以降でいい。

はやる気持ちをデタラメな鼻歌で宥めながら椅子から立ち上がる。研究スペースにある箱からサンプルを入れるための袋を掴み取って部屋から飛び出した。

部屋の外は中と同じのつぺりとしたグレーの壁に囲まれた通路で、分かれ道の近くには非常用の地図板が壁に埋め込まれている。規則的な機械の駆動音や、反響してぼやけた人の話し声の中を自分の足音が進む。

十分ほど歩くと自室から一番近い温帯温室だ。廊下を照らす蒼白な光は温室の扉を境に、黄色みがかった温かい色に変わる。室内は色彩に溢れている。光を透かす新葉を展開する落葉樹。常緑樹の肉厚な濃緑。大地からようやく頭をもたげ始めた草があたりこちで鮮やかな色の花を咲かせて賑々しい。

温帯温室はここ冷園ヘルヘイム最大の温室である。全部で三つある温室は第三次世界大戦と寒冷化により野生で絶滅した生物を保存管理したり、食用の動植物を育てたり、仕事の合間のレクリエーションとして利用されている。

ヘルヘイムは三百余人の人間が生活する研究施設だ。ちなみにこの名前が使われるのは施設外で行われる学会くらいしかない。氷雪地帯に存在し外部との交流がほぼない閉鎖的な環境なので、自称する必要があるのだ。この研究施設は世界最高の性能を持つ広大な情報処理設備を有し、世界中から送られてくるデータの解

析や環境修復のシミュレーションなどを行っている。情報処理設備の排熱を空調に活用しているため、寒冷な地域であるにも関わらず贅沢な温室が許されているのである。

最近の温帯温室は春の環境を再現しており、窪んだ地面が落ち葉から覗く道を歩いていると薄ら寒い空気がじわじわと服に染み込んでくる。

メガネのディスプレイからドローンのガングレットちゃんを要請する。道を外れて木立の中に足を向け、タグがくくり付けられた樹木の葉を採集していく。

届きそうで届かない葉に手を伸ばしていると、背後からHeよりも高めの声がかかった。

「お待たせしました。どこの葉を取りましょう」

「このっ、指先のやつを！」

視界の外から細い骨組みが組み合わさった腕が伸びて、指の先ではためく葉をぷつりと摘み取った。

ポケットから新しい袋を取り出して口を開けると、ガングレットちゃんが摘まんだ葉をそっと入れた。

「ありがとう。それからあの子とあの子の、一番上の主枝の先っぽの葉っぱと下の方の垂主枝の先っぽの葉っぱを三枚ずつ取ってください」

「F.CrenataとC.sinensisの葉をそれぞれ六枚ずつですね」

すい、と滑らかな動きで離れていくガングレットちゃんを見送りながら、僕はその場にしゃがみ込んだ。木の根元に無造作に置いてあるスコップを取って、足元の土を軽く掘り起こす。朽ちかけの落ち葉が混ざった土をスコップに乗せて小さな袋に詰める。場

所を変えて数か所で同じことを行い、袋にメモした識別番号と採取場所をリンクさせてメガネに記録させた。

戻ってきたガングレットちゃんから受け取った葉も袋に入れると、小さなサンプル袋で両手はいっぱいになった。ガングレットちゃんのボディ上部にある搬送用のボックスに袋を詰めると、負荷が増したプロペラの唸りが耳に届いた。

「土は土壌微生物をカウントした後いつもの方法で精製。葉っぱも精製までしておいて。どっちも四度で保存」

これで今日の仕事は終わりだ。時間はまだ九時半。コーヒーを飲むために僕は熱帯温室に向かった。

移動用の車両に乗って温帯温室を抜け、熱帯温室の入口をくぐる。開けた窓から湿った暖かい空気が車内に入ってくる。温帯温室よりも強い緑の香りが土の香りと混ざって漂う。袖を肘まで捲り、首元のボタンも外した。

熱帯温室はとにかく緑だ。木肌の茶色は着生植物と背丈が高い草で隠れていて、枯葉が堆積した地面とそれ以外で色がくっきり分かれて対比をなしているからそう感じるのだと思う。

熱帯温室では食料の生産はほとんどしていない。広さは一日で回れる程度しかなく、車両が入れるような幅がある道は温室の中央を貫く一本だけ。訪れる人は多くないが、人以外の生き物の鳴き声で賑やかだ。

温室の半ばほどまで車で進み、左右に伸びた小路の前で降りる。無人になった車は降りると温帯温室の方へ戻って行った。

植物に挟まれて一人分の幅しかない右側の隙間を抜けると、植物で葺かれた屋根を四本の柱に乗せた休憩所がぽつんと佇んでいる

た。休憩所に壁はなく、屋根の下でソファに埋もれている人が手を振るのが見えた。

手を振り返して近付くと、その人はソファから丸々とした体を起こして居住まいを正した。

「フィスカーさん、おはようございます。今日は休みですか？」

休んでいたのは友人のティカだった。穏やかな人柄で話しやすいので、見かけたらつい声をかけてしまう。

「さっきサンプル取りに行ったけど、もう明日までフリータイム。んふふ、来月提出の論文を早めにやつつけたんだ。だから今日はコーヒーを飲んでゆっくりするつもり」

「コーヒー！ 珍しいですね。お土産ですか？」

ティカの声が弾んだ。コーヒーは暖かい地域でしか育たない希少な嗜好品なので、ここでは滅多に手に入らない。

「実は五年くらい前から自分で作ってるのでーす！ 味の保証はできないけど飲む？」

「ぜひ！」

空調の近くに建物の梁から吊るしていたカゴを下ろす。風通しが良さそうなメッシュ状の生地と骨組みで出来たカゴの中に、緑がかった灰白色のコーヒー豆が所狭しと並べられている。

「どーよこのコーヒー豆！ 自然乾燥でカビさせないの大変だったんだ」

胸を張って手に下げたカゴを突き付けるが、ティカの反応は薄い。

「形は確かにコーヒー豆ですが……いただくものと色がかなり違うんですね」

「これから表面の皮を剥いて焦がせば見慣れたあれになるよ」

「ほう。皮は手作業で剥くんですか？」

「振とう機に十分間かけた後、剥がれた皮をドライヤーで飛ばして分離するの」

「焦がすのはどうすれば？」

「乾熱滅菌機にかけるんだけど、あんまり美味しくなくて。今年は味を改善するために昇温パターンを変えて、加熱後にマイナス十八度で冷やしてみようと思ってるんだけど、やってみてもいいかな？」

「もちろん。面白いことをしてるんですね。わたしにも何か出来ることはないですか？」

ティカはそれだけで焙煎できそうな熱い視線を豆に向けている。作る過程にも興味を持ってもらえて嬉しい限りだ。

「ティカは今日一日休み？」

ティカの目の焦点がずれて、しばらく宙をさまつた。メガネで予定を確認しているようだ。

「十六時までなら空けられます」

「充分。反対側の実験室で作るから付いて来て」

豆が入ったカゴを片手に連れ立って温室中央の道に戻る。そのまま広い道を横切って、来た道よりは道幅が広くて歩きやすく舗装された通路を道なりに進むと実験室に着く。立方体の白い平屋は周囲の景色から浮いていた。

実験室の名の通り、内部には生物系の実験で扱う設備が揃えられている。大型の機材はないが、繊細な試料を劣化しない状態で処理するくらいはできる。コーヒーを作るには過ぎた設備だ。

「これをチューブに入れて振とう処理しておいて欲しい。僕はその間に昇温パターンを乾熱滅菌機に設定するから」

「チューブは一番大きいのでよろしいですか？」

「よろしいよー」

後はティカに任せ、僕は乾熱滅菌機と向かい合う。前回は青臭さと渋みが酸味に絡みついて焦げた苦みと口の中で大乱闘する不味さだった。青臭さは豆い火が通る早さが不均等だったのかもしれないので、豆の水分量を合わせるための加熱を百十度で三十分間に変更。次に百六十度で十五分間加熱してあの香ばしい焦げ茶色まで焙煎。焦げた味は加熱後に余熱で焙煎が進んでしまったのが原因だと考えているので、いい具合の色になったらすぐに冷やすことで焙煎を止めることで防ぐ。

考えた昇温パターンを滅菌機に設定して予熱を始める。

「昇温パターンはどのように決めたんですか？」

轟々と鳴っている振とう機の傍に立ったティカが声を張って尋ねた。

先ほど考えていた前回の失敗原因の考察と改善策を伝えると、楽しそうにしきりに頷いた。

「とても興味深いです。今まで作ろうと思わなかったことが悔やまれます」

ピー、と振とうが終わったことを知らせる音が相槌のようなタイミングで鳴った。ティカが機器の中から砲弾のような円錐と円筒を合わせた形のチューブと呼ばれる容器を二つ取り出す。半透明のチューブの中には半分まで豆が入っている。

「皮が散らばるから、分離は外でやるよ」

「ドライヤーのコードの長さ足りますか？」

「入口の横の冷蔵庫の裏側にコンセントがあるから、そのを使えば届くよ」

ティカはこの実験室を使わないので知らないのも無理はない。

豆が入ったチューブとドライヤーを持ってドアに向かったティカを、金属製の浅いバットを持ち出して追いかける。外に出るタイミングでティカからチューブを受け取って、地面に置いたバットに屑皮が混ざった豆をさらさらと移した。皮の欠片が舞い散る。

「そう言えば豆はどうやって手に入れたんですか」

「熱帯温室にコーヒーの木が生えてるんだよ。毎年二月に実がなってる。実は赤くなつた時が濃い緑の葉に映えて綺麗だね、丸い実の中にコーヒー豆が二つ向かい合って入ってて可愛いんだ」

ドライヤーの準備が出来たティカが扉を開いて出て来る。

「分離やってみてもいいですか？」

「どうぞどうぞ」

ティカがドアを背にしてしゃがんだので、手が届く位置にバットを置く。

ぶおおとドライヤーが風を吹き出し始め、ティカは豆の方にドライヤーの口を向ける。

「ああっ！」

風が強く当たり過ぎた豆が数粒、バットを飛び越して逃げた。すかさず拾ってバットに戻す。

「ありがとうございます」

それ以降は順調に進み、豆はバットの中、皮は外に分かれた。バットをそのまま乾熱滅菌機に入れ、スタートボタンを押す。

次の作業は四十五分間だ。今は十時半なので、十一時十五分にタイムをセットする。

「飲めるのはお昼時になりそう」

「昼食と一緒にませんか？ コーヒーに合いそうなものをお持ちしますよ」

「やった！ じゃあ僕はデザートを採ってくるよ。加熱が終わった豆は僕が冷やしておくから、昼の準備ができれば朝会った休憩室に集合ね」

ティカと分かれた僕はデザート採集のお供にガングレトちゃんを呼んだ。来てくれた子は識別番号が違うので朝にサンプル採集を手伝ってもらった子とは違う個体だ。同じ形のドローンは沢山いるので、一番近くににいる子が来てくれるようになっていく。

暑さを我慢してシャツのボタンと捲った袖を直して、温室の鬱蒼と茂る植物の隙間を進む。通路と建物以外の場所は少し危ない虫もいるので、五分も歩かないうちに目的の植物が見付かった。

探していたのはバナナだ。切れ込みが入った一メートル以上ある楕円形の葉が、ささくれ立った幹の上部からダイナミックに伸びている。上下逆さまなしく型の黄色い実が連なって垂れる様は豪華なシャンデリアのようだ。

手が届かないのでガングレトちゃんに取ってもらう。小さいが二本で十分だろう。

まとわりついてくる虫を置いて足早に帰り道を辿った。

ぴびび、とアラートが鳴る。乾熱滅菌機の前でミトンを付けて待ち構えていた僕は素早くドアを開けた。香ばしいコーヒーの香

りが鼻孔をくすぐる。豆が入ったバットを取り出すと、その勢いで敷き詰められた茶色の豆が動いてそれまで見えなかった色が薄い面がちらりと見えた。一瞬逡巡したが、そのまま冷凍庫の布巾が敷かれた棚に突っ込んだ。

「また生焼け……」

口の中に広がる青臭さを思い出す。まだ失敗だと決まったわけではないが、念のためガングレトちゃんに砂糖と牛乳を休憩室に持ってきてもらうように手配しておく。

二十分後。豆がすっかり冷えたのを確認して、持ちやすいようにビニール袋に移す。バナナとコーヒーを入れる道具類と一緒にまとめて抱えて休憩室に運んだ。

ティカはまだ来ていなかった。ローテーブルの上に持ってきた物を置く。備え付けのマグカップをざっと洗えば準備は終わった。ジャワジャワと蟬が鳴く声を聞き流しながらソファにもたれてティカを待つ。

ティカより先にスティックタイプの砂糖とミルクピッチャーが届いた。ティカが来たのは十二時を過ぎた頃だった。

「お待たせしました。食堂でサンドイッチ買ってきました」

両腕いっぱい抱えたサンドイッチがすぐ隣のローテーブルに広げられる。五十センチ四方の天板がサンドイッチに埋もれた。

「食堂のサンドイッチ全種類買ってきたの？」

「ええ。食べられる分だけ先に選んでください。残りはわたしが食べますから」

「んじゃ遠慮なく。ベーコンレタスとアンチョビキャベツ貰うね」
手を伸ばして自分の分のサンドイッチを山から取り分ける。

ティカは僕の対面に座ってテーブルの上を眺めていた。

「豆が今回も一部生焼けになっちゃった」

「熱源の偏りが問題なのかもしれないですね。挽くのはすり鉢を使うんですか？」

「イエス。○・五ミリくらいの粒径を目標にしている。やってみるね」
目分量で一杯分の豆をすり鉢に入れ、すり潰すというよりもすりこ木で砕くように粒を細かくしていく。

「挽いた後にふるいで細かい粉を落として、残った方を使うよ」

マグカップに漏斗とろ紙をセットして、ふるいに残った荒い粒をろ紙に乗せた。

「ティカは自分でやる？」

「やりたいです」

ティカが豆を挽く間にお湯を準備する。ゴリゴリと豆を潰す音に、やがて水が沸騰する音が混ざる。

「できました」

お湯が入ったケトルを持ってテーブルに戻る。縁から溢れないように二つの漏斗に交互にお湯を注ぐと、湯気と一緒にふわりと香ばしい芳香が広がった。お湯に浮かぶ粉を沈めるように繰り返し注ぐ。

カップの七分目までコーヒーが満ちたところで、漏斗を外す。

「かんせーい」

「コーヒーの香りです！これは大成功なのではないですか？」

「まだ期待しちゃだめ。香りは良くても不味い時があった」

それぞれカップを手に取り、目配せし合っていたと同時にカップに口を付けた。

まず酸味が舌に広がり、青臭さが鼻へ抜ける。その後を苦みが追いかけてから、コーヒーは喉に流れ込んだ。後味は渋い。

「飲めなくはない……………去年よりはマシ。不味いけど」

顔を上げると、ティカが珍しく眉をしかめていた。

「香りは芳しいんですけど……………香りからは想像していなかった味でした」

「砂糖とミルク入れよう」

「そうですね」

ミルクの白がコーヒーの中で渦巻く。混ぜたものの、すぐには飲まずにどちらともなくサンドイッチを頬張る。イチゴの酸味とホイップクリームの甘さがコーヒーの味を忘れさせてくれた。

ベーコンレタスを残して、テイストチェンジしたコーヒーに手を付ける。

「あ、これはイケる」

砂糖とミルクにより、コーヒーはまろやかで飲みやすく変わっていた。

食べかけのサンドイッチを片付けてからコーヒーを飲んだティカも目を見開いて同意した。

「美味しいです！」

「五年に一度の当たり年」

「豊かな苦みと程よい酸味が調和した味」

「コーヒーは昼食のいいお供になった。」

「デザートは温室に生えるバナナだよ」

「たまに食堂にもありますよね」

「そのバナナを想像してるとがっかりする。これは原種だから種

がすごい」

「バナナに種……？」

「温帯温室に生えてるアケビくらいすごい」

「美味しいんですか？」

「食べてからのお楽しみ」

採ってきたバナナは流通しているものと比べると寸詰まりで、しずく型をしている。厚い皮を剥がすと裂けた断面から滲む汁が指に付着した。中の可食部は白い表面に黒い種がまだら模様のようになっている。

齧ると沢山の硬い種がじゃりじゃりと口の中で存在を主張する。果肉の表面だけでなく中にも種が隠れていて、口に入っただけではほぼ種である。口の中で舌を駆使して果肉と種を選り分けて種を吐き出すと、仄かに甘い果肉が僅かに残った。口の中で広がる香りはしつかりバナナ。

もごもごと動かしていた口から種を吐き出してティカが言った。

「食えることが好きでないと割に合わないですね。味は好みなのでまた食べたいです」

気に入ってもらえたようだ。

「コーヒーを作るのも、とても楽しかったです。来年も一緒に作らせてもらえませんか？」

「いいよ。来年は収穫から一緒にやろ」

嬉しそうににっこり笑った丸い顔に、僕も笑顔で返した。





喫茶店文芸

2021 年 2 月号

発行 喫茶店文芸

監修 マサユキ・マサオ

編集 氷川省吾

